

第26号
Vol.9-2
2012年9月1日

Dar i Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人樟泉内
TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>
現地事務所 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA
発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: kenkn@trn.net.my



旗、旗、旗の中、いよいよ到着の審査員のお出迎え

撮影者 中澤 健

オリンピックが終わった。日本の国旗が38本揚がった。11位だという。期待されて届かなかった選手の胸の内を思うと切なく、接戦には手に汗を握った。誰かが言った。金は最高だけど、銀は金に点抜きが良、銅は金と同じと書く、要するに金も銀も銅も素晴らしいと。うまいことを言う。勝利に向かって苦勞する、努力し、汗を流す、力を合わす、素晴らしいことだ。ちなみにマレーシアは銀と銅各1個、国旗2本が揚がった。

何もかもが勝ち負けでは寂しいが、面白い勝ち負けのコンペもある。美しい村コンペだ。前回は、地域で2位だった我がロングハウス。今、再びマレーシア1位を目指している。その準備がすごい。第1次の審査員が来る日は、道沿いの門から、ロングハウスに至る道、第2の門、バトミントンコート、小径も建物の外も内も、旗、旗、旗。大小何千枚の旗？ 誇らしげなマレーシア国旗とサラワクの州旗。壮観だ。(4頁参照)

このところ、毎日夕方や週末は必ずゴトンロヨン(住民の共同作業)。環境整備、清掃。嫌々やっている人は居ない。楽しそうだ。イベントが苦手な私も引き込まれる。イベントには違いないが、同時に彼らの日常生活だ。ロングハウスの外周も内側もすっかり綺麗になって、皆の表情が明るい。審査の後、「1位は無理かも知れない」と言いながら、Teukを呑み楽しむ。勝ち負けではない、一緒に目指した顔が美しい。(健)

海で暮らすならパラオにおじゃれ

パラオ在住
上杉 誠



パラオの象徴・ロックアイランド

Alli! (パラオ語でHello) いつもは、巻末のじゃらんじゃらんちゃりかわんを担当している上杉誠です。今回は、特別寄稿と言うことで、現在僕が住んでいる場所パラオ共和国についてご紹介させていただきます。

皆さんはパラオ共和国という国をご存知ですか？現代となってはあまり日本で知られていない国ですが、意外にも古くは日本との関わりが強く、戦前は日本の委任託領地であり、日本人入植者が多く住んでいた場所です。パラオ産のバイン缶や鰹節は日本人の食卓に上がり、アルミの材料になるボーキサイトや肥料の材料になるリン鉱石が採掘され、盛んに日本へと輸出されていました。特にリン鉱石は戦後復興のための食糧増産の支えとなり今の日本の礎となっていたのです。また、太平洋戦争の時には激戦地の一つでもあり、内南洋最後の防波堤とも呼ばれ、日本の家族を守るために2万人近くの英霊が静かに眠っている場所ともなっているのです。戦前はパラオのあたりを内南洋、ボルネオあたりを外南洋と呼び、憧れの南洋航路の一つとされ、どちらもエキゾチックな南洋の島々として憧れを集めていたのです。その表れが、「冒険ダン吉」であり、パラオで酋長の娘と結婚した杉山氏がモデルの一人とも言われる「私

のラバさん酋長の娘」、表題にしているのは、「パラオ恋しや」の歌の一節ですね。(ちょっと古いですがね…) そんなパラオは、日本の明石から真南に約3000km、ボルネ

オのシブからは北西に約2500kmの位置に浮かぶ海洋島です。一番近い大きな島はフィリピンで約800km、まさに絶海の孤島とも呼べる場所です。そんな絶海の孤島パラオも、実は遠く離れたマレーシア・ボルネオと関わりがあるようです。

こんな離れ小島に人類が渡ってきたのはおよそ3000～4000年前と言われ、人類の歴史の中では比較的新しい場所と言えるでしょう。そのルーツは東南アジアにあるとされ、大陸近くの海洋民族が新天地を求めてはるばる海を渡って、根付いた人たちの顔つきはマレー人と良く似た雰囲気を持つ人も多くなっています。

また、パラオ語の中にはマレー語と共通する単語をいくつか見ることが出来、「Blas=米」「Susu=おっぱい」「Payong=かさ」など、生活に根ざした言葉には同じ単語があり、マレーシアから南太平洋に広がるオーストロネシア語族の一端を担う、同じ民族であることが伺えます。そもそも、「パラオ」の名の語源は、マレー語の「Pulau=島」であるという説もあり、もしかしたら冒険航海をしていたヨーロッパ人達がパラオを発見した際に、水先案内人として連れてきたマレー人に、「あそこは何だ？」と聞いたら、「島(Pulau)だ!」と答えたのが「PNAL」に転

じたのではないかと想像するのも楽しいものです。さらには伝統的な集会所として知られる「アバイ」「ブライ」と呼ばれる建物は三角屋根の横長高床式の木造りで中を仕切って何家族かが共同生活をします。同じ建て方のマレーシア伝統の建物をサバヤトレンガスの州立博物館で見ることが出来ますし、その生活ぶりは、ロングハウスそのままとも言える生活様式も伺えるのです。

こうしてみると、以前住んでいたボルネオ、そして現在住んでいるパラオとは意外な共通事項が色々あり、驚くこともしばしば、古代の海洋民族と同じ様なルートをたどって、こんな場所まで来てしまったのかな、と感慨深くもなってしまう。

現代のパラオは人口約2万人、面積は琵琶湖の中に収まってしまいくらいの小さな国ですが、人口の少なさも相まって大自然あふれた場所なのです。特にその海は素晴らしく、ボルネオ同様ダイバー憧れの地になっています。さらにはサラワクのミリ国立公園のような石灰岩の大地が小さな島々を作り出すロックアイランド(パラオ松島)の風景はパラオ独特で、海に浸食を受けたキノコのようなかわいらしい島と様々な色に輝くラグーンの海が作り出す光景は、パラオ独特の風景を作り上げ、特殊な生態系もあわせて先日世界遺産にも登録されました。

そんな大自然にあふれるパラオで、今僕はこの素晴らしい自然を紹介するネイチャーガイドとして活躍しています。ボルネオ同様、あふれる自然の中のんびりとした時間を過ごしながら、いまだに「Julan Julan Geri Kawau」(友達探しに行こう!)な日々を送っているのです。

ガーナで輝くロングハウスの思い出

ガーナ在住
石藤 可苗

私が西アフリカ・ガーナ共和国に住み始めて、1年10ヶ月が過ぎました。青年海外協力隊としてこの地に来ることが決まる前は、『ガーナ』といっても、『チョコレート』『奴隷貿易』くらいしか思い浮かばず、正確な位置も首都がどこなのかもわからず、全くの未知の世界でした。はじめてガーナに来て抱いた印象は、私が持っているアフリカというイメージとは全く違い、大変驚いたことを覚えています。首都アクラは日本の都市のような大都会で、ほとんどの人が携帯電話を持ち、車も多く渋滞に悩まされ、また女性はみんなオシャレで、髪の毛を編み、カラフルなガーナドレスを着こなしていました。至るところでガーナカラー（ガーナの国旗の赤・黄色・緑）を目にし、愛国心のある素敵な国だと感じ、一瞬でガーナが好きになりました。

私が派遣されたのは、アシャンティろう学校という聴覚に障がいのある児童・生徒の学校です。幼稚園・小学部・中学部・職業訓練部がある全寮制の学校で、聴覚障がいに加え、知的障がい・身体障がいのある子もいて5歳～25歳までの計500人強の子供達が共に生活しています。私は学校内に住みながら、職業訓練部と小学部高学年の生徒に対して、コンピューターの授業をしています。また、職業訓練部の生徒たちにガーナで大量に捨てられているゴミを利用して小物入れ作りを指導し、販売することで収入獲得の練習をさせています。使う言語はガーナ手話。ガーナの手話はアメリカ手話がベースで、日本の手話とは全く異なります。日本と違い、補聴器を付けている子もいません。はじめは手話

に苦労しましたが、人懐っこく素直な生徒が多く、すぐこの学校が大好きになりました。

そんな順風満帆な活動を送っているように見える私ですが、赴任当初悩んでいたことがあります。それは、『黒人』と『白人』の違いの大きさです。ガーナで外を歩いていると必ず「オプロニ（現地語で白人の意）」「チャイナ」「チンチョン（中国人を小馬鹿にした言葉）」と声をかけられます。日本では、人種差別はいけないと教えられているし、ガーナ食を食べ、現地語を覚え、共に生活し、「外国人のお客さん」から「コミュニティの一員」になりたいと気合いの入っていた私は、非常に驚き、またショックでした。肌の色

酒)を飲んで談笑したり…。ジュネレーターが付けられない私を、頼んでいないのに心配して手伝いに来てくれた男性、何度もご飯に招待してくれたお隣のおばさん、言葉がわからなくても通じ合っていたようなあの時間。あの時はイバン族のホスピタリティに感謝したのですが、見知らぬ外国人の私にも最初から優しくしてくれたのは、中澤先生や和代さんがイバン族の方々と築いてきた関係のおかげなのだ、ガーナに来てやっとわかりました。そしてあそこまでの関係を築かれた中澤先生と和代さんに改めて感謝し、私もあのような関係をガーナ人と築きたいと、パワーをもらいました。

「先進国から来たオプロニ」という私のバックグラウンドは消すことはできません。100%ガーナ人になることはできないけど、彼らに寄り添うことで、1年10ヶ月たった今、私を一人の人間として見てくれ、好きだといってくれる人が増えたと感じます。喧嘩したり、謝ったり、ご飯を招待し合ったり、冗談を言って笑ったり…。周りにいるすべてのガーナ人とそうできるわけではありませんが、そんなことができる人がたくさんいます。そして彼らの中で、私は「オプロニ」ではなく「カナエ」や「ヤー（私のガーナネーム）」であると、自信を持って言えます。未だに彼らと衝突することや見知らぬ人の心無い言葉に傷つくことはありますが私はこんなガーナが好きです。残りの2ヶ月も、ガーナ人と共に笑ったり怒ったりしながら、活動していきたいと思えます。6年前にロングハウスで見た中澤夫妻とイバン族のような関係を夢見て…。



小学部8年生のクラスで開催したタイピングコンペティション
タイピングが早くできた子には手作りメダルをあげました。

だけで、「お金持ちだ」とか「結婚して君の国に連れて帰ってくれ」と言われることがたまに嫌でした。

こんな打ちひしがれているときによく思い出したのは、2006年、私が大学4年生の夏休みに訪れたマレーシアでの体験でした。中澤先生と和代さんが暮らしているロングハウスで、イバン族の方と共に2週間ほど生活させていただきました。一緒に農業をしたり、あの長楯下に座ってトアック（現地

酒)を飲んで談笑したり…。ジュネレーターが付けられない私を、頼んでいないのに心配して手伝いに来てくれた男性、何度もご飯に招待してくれたお隣のおばさん、言葉がわからなくても通じ合っていたようなあの時間。あの時はイバン族のホスピタリティに感謝したのですが、見知らぬ外国人の私にも最初から優しくしてくれたのは、中澤先生や和代さんがイバン族の方々と築いてきた関係のおかげなのだ、ガーナに来てやっとわかりました。そしてあそこまでの関係を築かれた中澤先生と和代さんに改めて感謝し、私もあのような関係をガーナ人と築きたいと、パワーをもらいました。

続・カンポン(村)コンペティション

中澤 和代

続ロングハウスコンペ、ほんとうに続いているのです！マレーシアのコンペについてお知らせしたのは、4月17日の第1回コンペのことでした。NE総会のため帰国中の私にある会員の方から「コンペの結果はどうだったの？楽しみにしているから、続きを書いてくださいね」と言われ、読んでくださっているのだと嬉しく思ったけれど、続きを書ける程の内容があるかどうかはわからなかった。

結果は、サラワク州63のカンポン(村)のうち、1位は、マレー系カンポン。私たちのロングハウスは2位だったそうなの…。立派な賞状と賞金(Rm 8,000)を取得したトゥアイルマ・マイケルはその賞金で、イベントの時に着用するようにと、ロングハウスのみんなにお揃いのユニホームを作ることを提案。7月のある日の早朝、みんなでSibuの街のデパートに行き採寸。男性はパティックのシャツ、女性はバジュクバヤ。いずれもマレーシアの正装。

これをみんなで着るって壮観だろうなと想像した。実はこれを着る機会が意外と早くきたのである。

7月9日、マレーシア全体のコンペ予選日である。当初、この日はマレーシア独立記念日(7月31日)に向けての66周年記念コンペと聞いていた。マレーシアは、17世紀中期から長い間イギリスの植民地支配を受け、1941年から3年半は日本軍の占領時代。その後の12年間は、再度のイギリス支配の後、1957年に悲願の独立を果たしている。ロングハウスは、このコンペに沸き立った。独立記念を祝い、門、ロングハウス、マンデイ(行水)の川まで、ゴトンロヨン(共同作業)により、何千枚か、数え切れない程のマレーシア国旗とサラワク州の旗で埋め尽くされたのである。みんな自国マレーシアが好き、よって、旗は誇りなのだ。もし、日本でこれをすれば、世間か

らどのように解釈されるであろうか？と考えたら妙な気がした。日本では、旗、旗になってもOKなのは、国際的スポーツイベントの時ぐらいではないだろうか。多民族なればこそ、マレーシアは一つ(Satu Malaysia)と国旗を掲げている。自国を好きで誇りに思うことは大切だと感じた。同じくロングハウス人のたちがお揃いのユニホームで楽しむことも自分たち一族とコミュニティに対する誇りだと解釈できる。総勢10人ぐらいで訪れた情報局・開発局の審査員た

のコースで、一行は、我が家の居間、台所、2階の和室を珍しそうに覗き、ひとしきりの撮影会となった。私もみんなと同じバジュクバヤを新調してもらっているが、インターナショナルロングハウスを標榜するトゥアイルマ・マイケルは、この日も唯一人のムスリムの住人にはマレーの衣装、私には和服着用を要望した。写真撮影の間中若くないモデルの自覚に、居心地が悪かったが、ロングハウスの人たちは1位を目指して浮き立っ

ている。何しろ1位はRM 1,000,000(1ミリオン)だということから無理もない。「みんなでもルデカ(独立!)と拳をあげ国歌を歌う。

それから間もなく、この様子を聞いた役所の他の人たちが再予選のため、8月13日に訪れた。この日も同じような経過をたどったが、その度にみんなでゴトンロヨン。もてなしの

準備と清掃の後、お祭り気分盛り上がりしている。正直、私の疲労



お揃いのユニホームを着て

の疲労度は高くなり、着用後の私服の手入れもつい手抜き。イバンの人たちのパワーに圧倒されて、我が身の弱さを知ることになる。審査が終わったあと、バワン川で小さな豚が生け簀になり料理された。夕方、ロングハウスの人たちと外の共同キッチンで、BBQ・夕食と続く…。暮れなずむ薄青い空、地べたに座り込み、焼きたてのお肉を辛い唐辛子入りの醤油につけていただく。みんな楽しそうだ。人々の幸せは素朴なつながりの中にあることが疲れの中でも理解できる。最終審査は9月中旬とのこと。まだ、続く、続く…。みんなですべての結果を待つのも楽しみ！



ロングハウスの扉下も旗、旗、旗

ちは、ハイテンションのロングハウスと住人のホスピタリティーに触れ、心から楽しそうであった。ラマダン(イスラム教断食)の期間中故、飲食は一切なかったが、彼らから多くの質問が寄せられ、みんなの楽しげな様子が伝わりロングハウスの人たちも満足気。

では、コンペティションの評価基準を確認してみよう。ウェルカムの雰囲気、ホスピタリティー、清潔度(衛生)、チームワーク、トゥアイルマのリーダーシップ、コンセプト、サインボード、独立記念に関しては、マレーシアポリシーに沿っているか、旗を大切に考えているか、他(経済、教育、健康、平和、公共性、美)等、生活のあらゆる面を審査する。この日の審査員は、挨拶の中でも、しきりに「このロングハウスは、素晴らしい！5つ星だ！」と誉めていた。行きがかりというか、いつも

ACSだより

ペナン在住 内海 明美

新職員紹介

(Stepping Stone support centre for community living)



Izzatiさん(左)とCalvinさん(右)

NoorIzzati (21才、女性) は、去年12月、Ong Kee Wah (53才、男性) は、今年2月から作業所に勤務しています。

Izzati (呼び名) は、さをりに興味を示し、新しい模様のを織り上げ、メンバーたちが彼女の織るさをりに、刺激を受けて、色を選んだり、どんな風に織るの

かを、注目していました。

Calvin (Ongさんの呼び名) は、小学校を卒業し、お兄さんが家庭で国語、算数を教えパン職人として働いてきました。去年は、ボランティアとして週1回作業所でパン製造をしていましたが、今年2月に正式に職員となりました。この2人に

共通しているのは、作業所のメンバーにとってもやさしい態度です。

年季を積んだ職員は、すべてわかっている態度でメンバーにのぞみますが、新しい職員は、すべてが初めての経験で、メンバーに尋ねるので、年上のおばちゃんたちよりずーっと近い存在、メンバーも同じようです。巨休み、ガゼボ

(休憩所) でメンバーの肩をもんだり、メンバーも若い職員に親近感があり、男性陣も彼女をからかったり、かわいい彼女が大好きなようです。婚約式を済ませ、今年の12月中には結婚する計画とのことですが、「結婚しても働くの?」という質問に、「家にいてもすることがないので働く」と言います。3人兄妹で、たった1人の妹である彼女は、大切にされています。新しい職員が、スムーズにメンバーに溶け込んでいるのを見て、若い職員をどう育てるか、おばちゃんたちに、しっかり考えていただくかなくちゃと思います。

Izzati, Calvinは、ただいまパン、クッキー部で、マレーの菓子 (kekamur) の新しいレシピを加え、ハリラヤ (断食後の祭日) の販売商品として製造するため、がんばっています。

RCSはいま

中澤 和代

Mahibahセンターを建設すべく山を切り崩して、1エーカーの土地ができたのが2006年5月でした。同じ年の8月、第1回目のワークキャンプから建物の建設にかかり、1年半後の2007年12月に建物が完成しました。翌2008年1月からメンバーが利用しはじめました。

2月にソフトオープニングを実施した時には、門からセンターに続く、200mの道路は雨でぬかるみ、車がスリップして大変でした。その日、オープニングセレモニーに出席して下さっていたコタキナバル総領事館・総領事らのご尽力で、日本大使館の「草の根資金」をいただくことになり、3月にはその資金で、道路にアスファルト舗装が出来ました。きれいに整備されて安心したのですが、サラワクの大雨は厳しく、その9ヶ月後

道路の一部が崩れました。しばらくそのままにせざるを得なかったのですが、1年半過ぎた2010年8月地域の人たちのゴトロンヨンで道路は補修されました。ホッとしたのもつかの間、1年半余り経った昨年12月の大雨で再び前回と同じ場所が崩れました。今度は前回より大幅に崩れ、その後も度重なる激しい雨で崩落を続け、道路幅が狭くなり、危険を感じるようになったため、工事開始に踏み切りました。地元の人たちにお頼りする段階ではなかったため、Sibuの専門業者に依頼しました。

いよいよ8月13日にショベルローダーが来て、15日から山を切り崩し一部新しい道路を造り始めています。8月31日の“National Day”までに完成を目指しています。

9月2日には、第13回のワークキ

☆☆☆ 再び道路工事 ☆☆☆



上：崩れた道路 下：現在補修中

ャンプが始まります。それまでには、安全な一部新しい道路が出来上がっていることでしょう。

じやらんじやらん ちゅんちゅん がわん♪ (26回)

スウィートホームは毒の森

上杉 誠

クマノミという魚を知っていますか？ オレンジ色に白の線、くねくね泳ぐ愛らしい姿はディズニー映画の「ファインディングニモ」でもおなじみの魚です。水族館やダイビングでも人気者。サラワクの高にもたくさん棲んでいます。世界中に39種類いるこのクマノミの仲間、姿は赤黒オレンジ茶色、線の数も全くないものから3本線まで様々ですが、その全てがイソギンチャクの中に棲んでいるのが特徴です。イソギンチャクの触手のカーベットのの中を泳ぐクマノミはいかにも気持ちよさそう。最高の居心地の様に見えますが、このイソギンチャクが厄介者。ふにゃふにゃと伸びる極上カーベット、実は毒の森なのです。

イソギンチャクはこの触手に餌を捕まえるための毒があり、近寄ってきてうっかりこの触手に触ってしまった魚を捕まえて食べてしまってしまうのです。この毒は意外と強く、結構大きな魚もしびれて動けなくなってしまいますし、人間が触ってしまったら、

くは痛がゆい思いをしなければならぬほど。そんな毒の触手の中で暮らすクマノミっていったい…？そこには上手い具合のからくりが働いていて、クマノミはこのイソギンチャクの中で暮らすために体の表面から毒を防ぐための粘膜を出すことによって、このイソギンチャクの毒からちゃんと身を守っているのです。そして、毒の触手の中に隠れることで、他の大きな魚たちから身を守っているのです。

余談ですが、このクマノミ、大きな魚にとってはかなり美味しいらしく、以前、ちゃんと元のイソギンチャクに戻れるのかな？とちよっと離れたところに放してみたら、一目散にイソギンチャクに向かって泳いでいったのですが、あつと言う間にどこからとも無く現れた魚にバクッと食べられてしまった苦い思い出があります…。それはさておき。

クマノミもイソギンチャクの中にただで棲んでいるわけには行きません。ちゃんと掃除をしたり、



ガクレクマノミ

時には食べ物を運んであげたり、かいがいしく世話を焼きながら、ちゃんとお互いに助け合って生きています。

そんなイソギンチャクの中に住み始めたクマノミ達はやがて一番強いものがメスになり子育てをしていきます。(生まれたときは全部オスなんです) イソギンチャクの裏側の安全な場所に卵を産んでオスメス共同で大切に子育てをしていくのです。

スウィートホームは毒の森ですが意外にも安全で快適なおうちなんです。

Julian Julian and Kazuo はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会 (ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているベナン(MS)とサラワクのMSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。



- ・今号は、マレーシア・サラワク州で知り合い、親しくさせていたお二人の中で、その後、さらに別の国で、それぞれの得意分野に力を発揮されていらっしゃるお二人の現在の活動状況や、その国、地域の様子をお知らせいただきました。国や人種・言語が違っても、人と人は心を通わせ合い、過去を振り返り、新たな関係と歴史を創ってゆく素晴らしい存在だと思いました。
- ・創刊号から欠かさずマレーシアの珍しい生物のことを書いて下さっている上杉さん。現在パラボオで活躍中。そこで、今回はパラボオからの特別寄稿をお願いした。前々から、誠実で頼もしい彼のハートを射止めるのはどんな女性？と思っていたのですが、今年6月電撃的に結婚！嬉しい情報から知ってびっくりしました。心からおめでとう！美しいパラボオの自然の中、素敵なお家庭を築かれることでしょう。いつか、必ず、会いに行きますよ。

(Ken & Kazuo)